

珠が口入れ屋の店舗内を掃除していると、店の戸が叩かれた。普段は開け放しているが、今日は店を開けていなかったのだ。

「あっ今日は休みだったな、しまった……おおい誰かいるか？」

次いで聞こえてきた男性の声は、銀市の友人である御堂のものだった。

珠が振り返ると、作業をしていた銀市は手が離せない様子である。

「すまない珠、出てくれるか？」

「はい」

うなずいた珠が入り口に近づいて戸を開ける。そこには予想通り、顔に眼鏡をかけた軍服姿の御堂が立っていた。

「御堂様、いらっしゃいませ」

「や、やあ珠嬢。銀市は話せそうかい？」

一瞬だけ、決まり悪そうな顔をした御堂だったが、柔和に話しかけてくる。

そう言えば例の姑獲鳥の件があったあと、こうして面と向かって話をするのは初めてかもしれない。だが、珠にとっては終わった事のため特に気にせず、彼と視線を合わせようとぐっと頭を上に向けた。

御堂は普通の男性よりも背が高い。そして、珠は人よりも小柄なため、背の高い人には声が届きにくいことがある。以前の主人に叱責されて以降、気を付けるようにしていた。

「その……」

だが珠が話す前に、御堂は眼鏡の奥の瞳を瞬かせると屈んできた。そのおかげで首が若干楽になる。

「なんだい？」

「っあ、その。今、店内は掃除中なんです。散らかっておりますので、どうぞお気を付けて」

「なるほどね、銀市にちょっと見てほしいものがあったんだけど」

少し言葉に詰まりながらも、珠が説明すると、御堂は納得して店内に入ってくる。

店奥では作業が一段落したらしい銀市が立ち上がっていた。

「御堂、ちょうど良かった。時間があるなら少し手伝っていけ。用件はそれから聞こう」

「ええ！？ まあ良いけど……」

断らないと確信している様子で銀市が願うのに、御堂はやれやれといった様子だ。

けれど彼は、天井から下がってきた天井下がりから脱いだ上着を渡すと、銀市に指示を仰ぎにゆく。そうして並ぶと、銀市と御堂の背丈はさほど変わらない。若干銀市のほうが高い位だろうか。

珠は店の引き戸を閉めつつながめていたが、店の壁に掛けてある時計を見て気づく。

そのため、珠は御堂との話が終わった銀市に近づいた。

「だ、……銀、市さん」

一瞬口をつきかけたそれを言い直したのには、気づかれなかっただろうか。

ひっそりとうかがうと、銀市はわずかに複雑な色を浮べていたがそれだけだ。

「どうした？」

珠は首を上に向けようとしたが、銀市の視線が少し近づき話しやすくなる。あれ、と思いながらも要件を告げた。

「昼食の支度をしたいので、一端抜けても良いでしょうか？」

「もうそんな時間か。頼んだ。できたら呼びに来てくれ」

了承してくれた銀市に、ほっとした珠だったが、そこで気づいた。

少し視線を下に向ければ、銀市がかがめていた腰を元に戻すところだ。

「あの、まだ声が聞き取りづらかったのでしょうか。申し訳ありません。かがまれなくて済むようにしますね」

配慮が足りなかったと、珠は悄然とする。銀市はなんの事か分からない様子で瞬いていたが、得心すると苦笑した。

「以前から君の話は聞き取りやすい、とは思っていたがあえてだったか。いつもありがとう」

「い、いえ……」

「ただ、君が一生懸命首を曲げてこちらを見上げているのが、どうにも痛そうでな。あと、上から見下ろされると怖いものだろう？ だから気にしなくて良い」

逆に礼を言われて狼狽えた珠だったが、銀市が続けた言葉に思わず己の首に手を置く。

ずっと見上げるばかりだったから、見下ろす人にどのように見えているかまでは思い至ってなかった。それが当然だと思っていたのだから、気にしなくて良いと言うべきは珠のほうだということに。

珠がなんと返すべきか迷っていると、銀市がまた少し身をかがめて、若干声量を落として語りかけてきた。

「それで、御堂のことなんだが。……君は複雑だろうが、あれも悪い男ではないんだ。ここに出入りすることも多いから、ゆっくり付き合っ欲しい」

瞬いた珠は、銀市を見返す。彼はわずかに申し訳なさそうにこちらを伺っていた。

願われずとも、御堂は雇い主の友人なのだ。珠は粗略に扱う気など毛頭ない。だがそれでも銀市は、珠に多くの配慮をしてくれるのだろう。

それに、と先ほどの御堂を思い出した珠は、そっと声を落として銀市に語った。

「御堂様が良い方なのは、私もわかりますから」

銀市の話が本当なら、御堂もまた何も言わず、珠が話しやすいように腰をかがめてくれる人だから。

「昼食は、御堂様の分もご用意しても良いでしょうか？」

珠が提案に少し驚いた銀市だったが、温かく目元を緩める。

「ああ、助かる。——御堂！ 昼飯を食べていけ」

「えっいいのかい！ それは、助かるけど」

戸惑い気味にこちらを振り返る御堂に対し、珠は軽く会釈をして踵をかえす。

台所へ向かいながら、珠は食べ応えのあるおかずを作り足そうと思案したのだった。